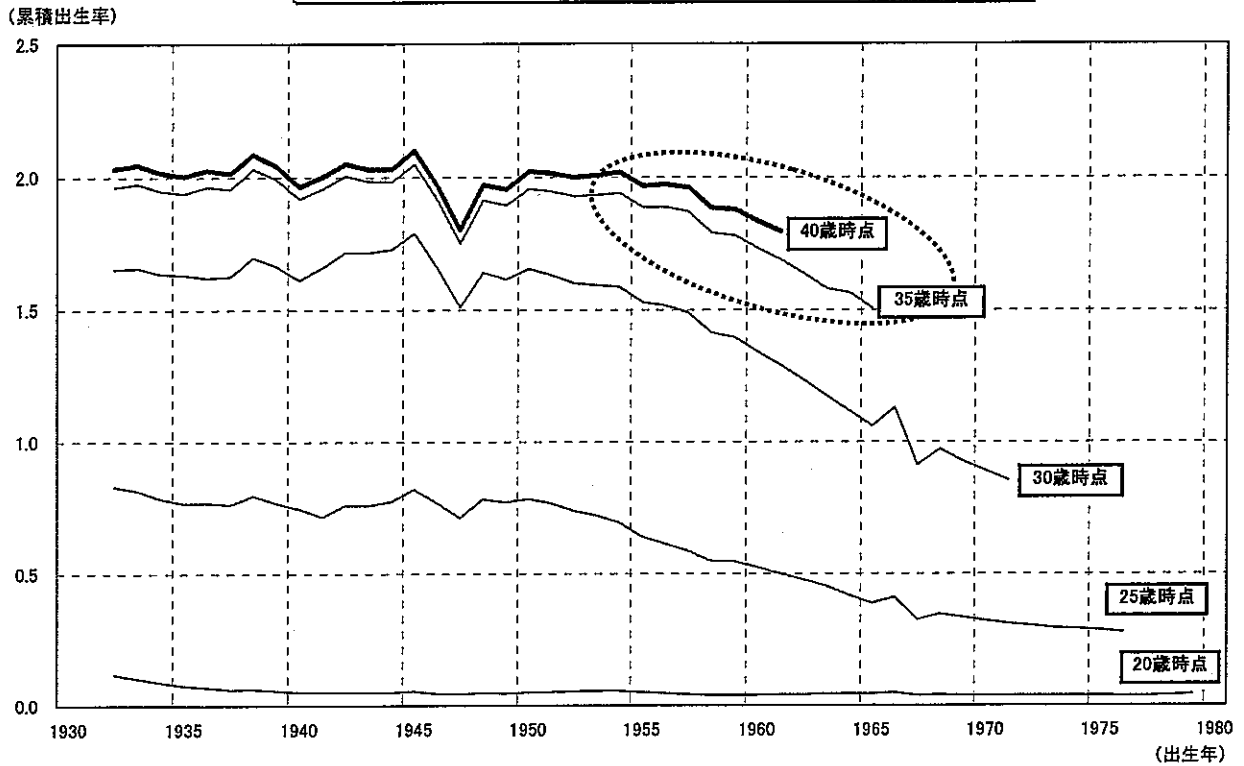
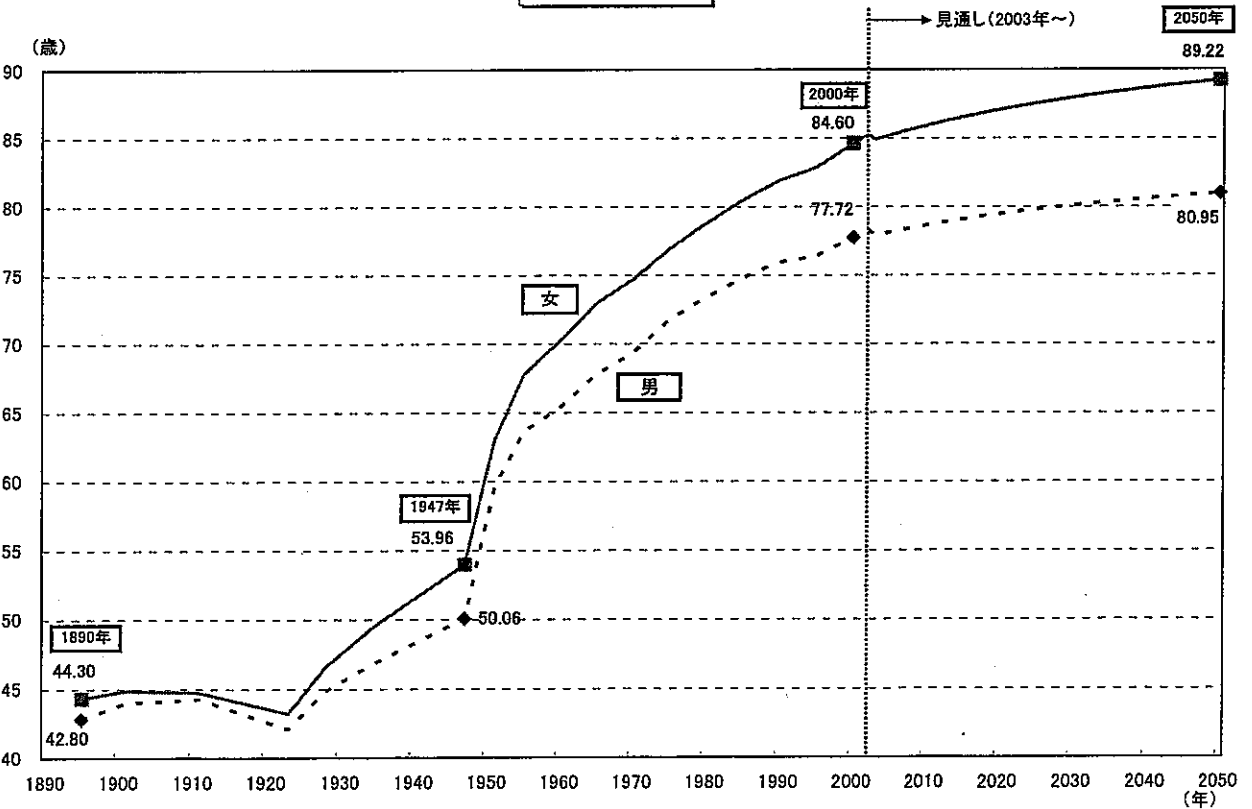


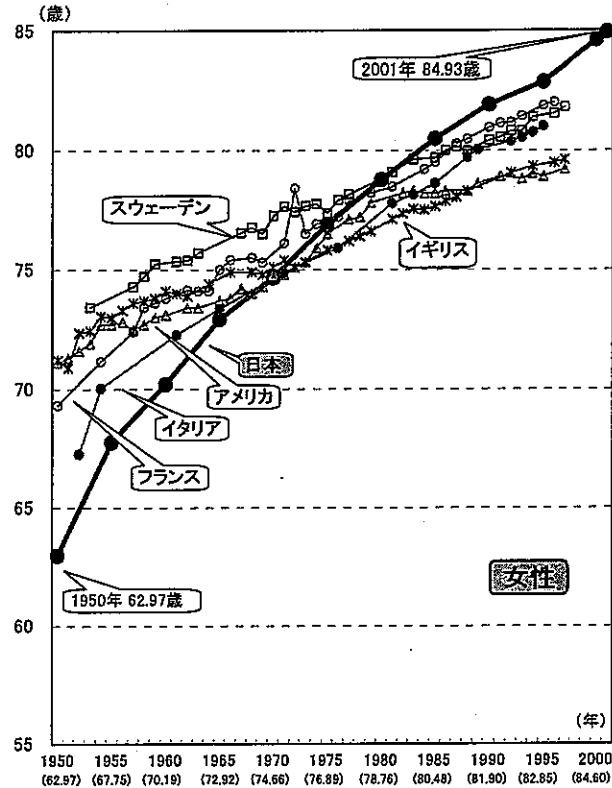
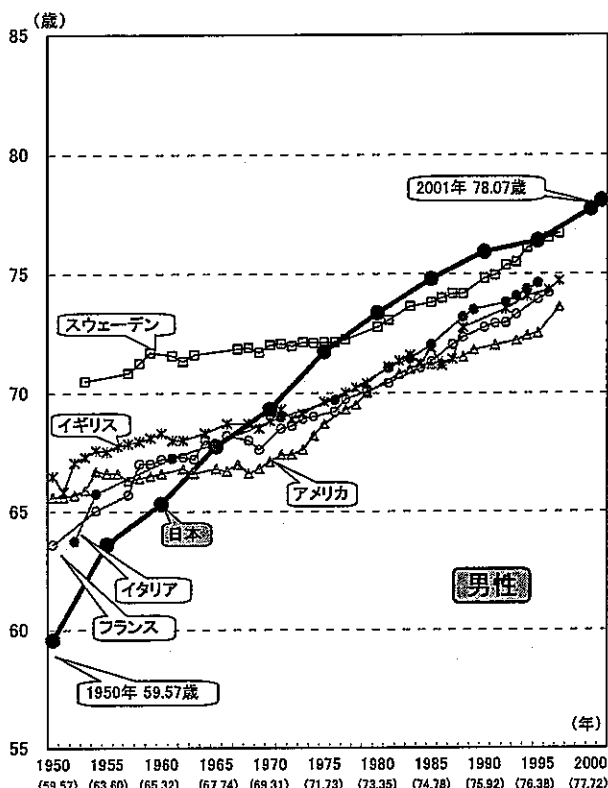
女子のコホート別累積出生率の推移(1947年~2001年コホート)



平均寿命の推移

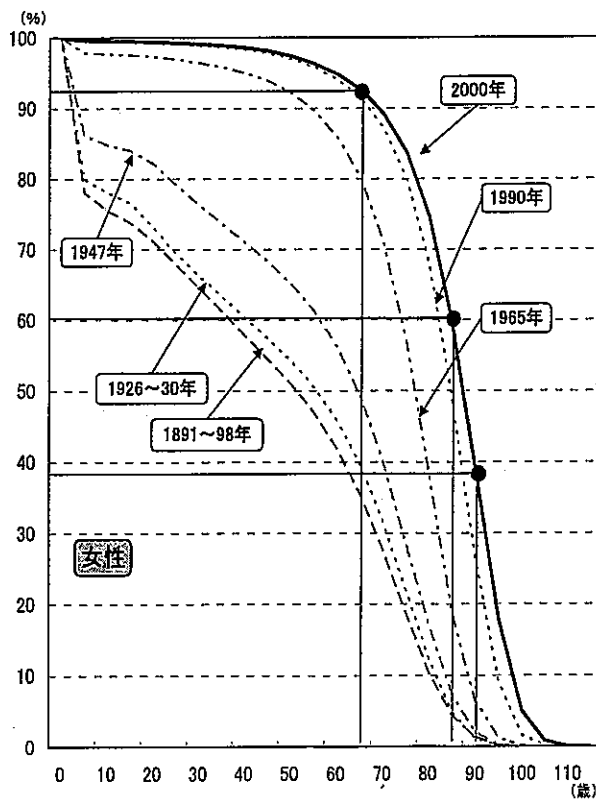
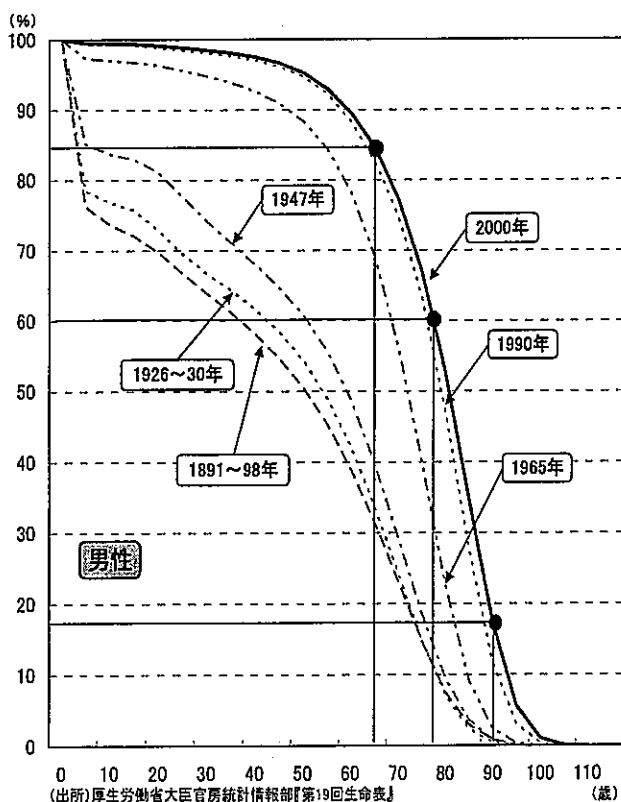


平均寿命の推移の国際比較



(備考) 日本の1950年の値は、1950年～1952年の平均値である。カッコ書きの数字は各年における日本の平均寿命である。
(出所) 国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集(2003年版)』

特定年齢までの生存率の推移



家族周期の歴史的比較
～鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』から引用～

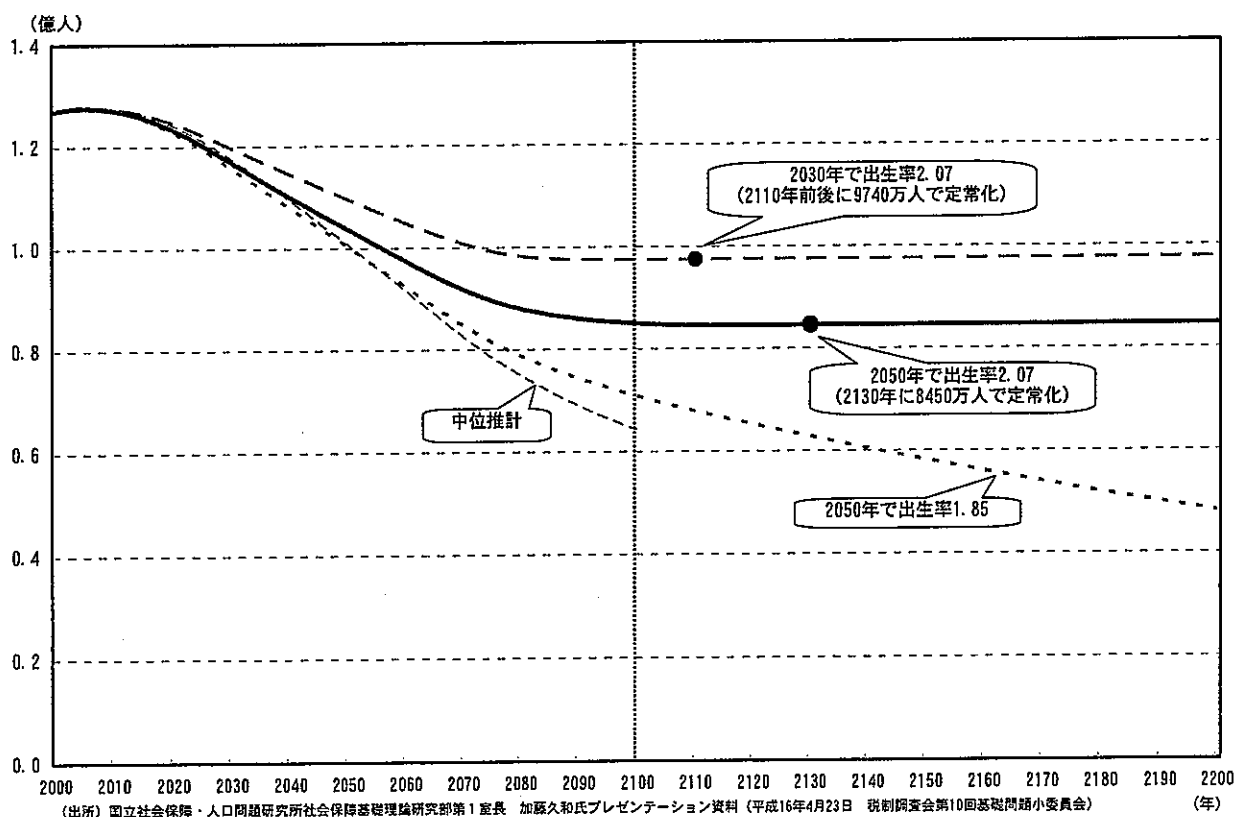
	男(夫)			女(妻)		
	18世紀 (信濃湯舟沢村)	1920年 (大正期)	1990年 (現代)	18世紀 (信濃湯舟沢村)	1920年 (大正期)	1990年 (現代)
①結婚	26.4歳	25.0歳	28.0歳	20.6歳	21.0歳	26.0歳
②第1子出生	29.5歳	27.5歳	29.7歳	23.7歳	23.5歳	27.7歳
③末子出生	46.1歳	39.5歳	32.0歳	40.3歳	35.5歳	30.0歳
④末子成人/学卒	61.1歳	54.5歳	52.0歳	55.3歳	50.5歳	50.0歳
⑤死亡	62.6歳	61.5歳	77.1歳	55.6歳	61.0歳	82.7歳
(配偶者死亡後の期間)	(+1.2年)	—	—	—	(+3.5年)	(+7.6年)

出生期間 (③-①)	19.7年	14.5年	4.0年	19.7年	14.5年	4.0年
子供扶養期間 (④-②)	31.6年	27年	22.3年	31.6年	27年	22.3年
脱扶養期間 (⑤-④)	1.5年	7.0年	25.0年	0.3年	10.5年	32.7年
結婚後期間 (⑤-①)	36.2年	36.5年	49.1年	35.0年	40.0年	56.7年

(備考) 下記「出所」において、宗門改帳等の文献及び一定の仮定を置いて試算したもの。(例えば、①江戸時代の成人及び大正期の学卒を15歳、現代の学卒を20歳と仮定、

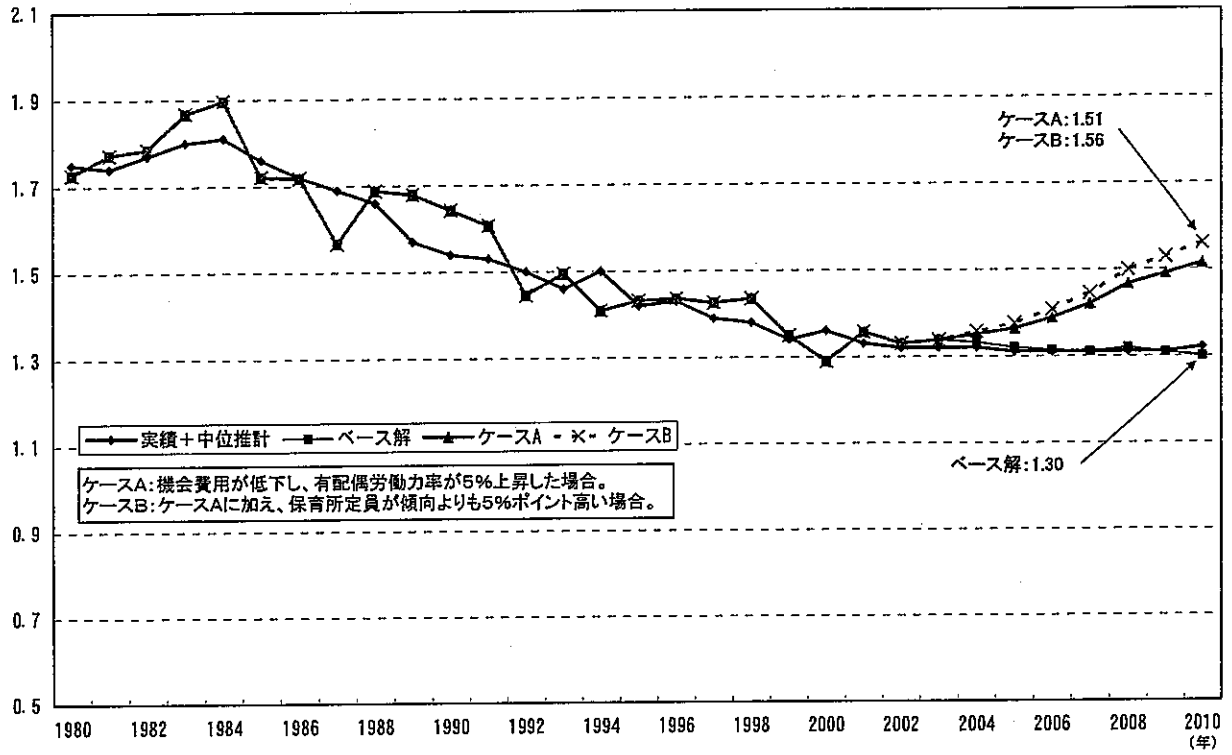
②出生数は江戸時代及び大正期を5人、現代を2人と仮定、③夫婦の死亡年齢は、結婚等の平均余命により計算など。)

(出所) 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』より引用(232頁)



機会費用低減の効果

(出生率)



(出所) 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障基礎理論研究部第1室長 加藤久和氏プレゼンテーション資料(平成16年4月23日 税制調査会第10回基礎問題小委員会)

VI 「実像」把握⑥ 「グローバル化」 平成 16 年 4 月 27 日 (火)

藤本隆宏 東京大学経済学部教授

梶田孝道 一橋大学大学院社会学研究科教授

山崎正和 東亜大学学長

1. データ等からみた「グローバル化」

(1) 世界レベルでのグローバル化の進行

- 「グローバル化」とは、IMF の定義によれば、「国境を越える様々な財・サービスの取引や国際的な資本の流れ、更にはテクノロジーの広汎な普及を通じて世界中の国々が相互関係を強めていく状態」とされる。
- 冷戦終結、貿易や資本取引の自由化、情報通信革命 (IT 化) の進行等を背景に、1980 年代以降、世界レベルでグローバル化が急速に進行し、モノ・カネ・情報等の国際的な動きが活発化している。
 - 全世界ベースの商品輸出の対 GDP 比率を見ると、第一次世界大戦前に急増し、その後、1960 年代までは第一次世界大戦前の水準を超えることはなかったが、最近の 20 年間著しい上昇を示している。
 - 全世界ベースの対外資産の対 GDP 比率を見ると、1980 年頃に第一次世界大戦前の水準と同水準になった後、急上昇している。全世界ベースでの証券投資残高も、同様に急増している。〈資料 VI-1〉
- こうした「グローバル化」の動きは、東アジアをはじめとする新興経済国・地域や旧社会主義圏などへ拡大している。他方で、欧州、北米、アジアにおける域内貿易の割合が高まるなど、グローバル化に並行して地域的な経済連携の動きが強まっている。〈資料 VI-2〉
- 最近では、グローバルに展開される企業活動に加え、非政府組織等の民間ネットワークの活動も拡大・活発化している。
- 「グローバル化」をめぐっては、情報ディバイド等の顕在化、貧富の差の拡大、伝統文化の破壊、ナショナル・アイデンティティのゆらぎ、金融危機やテロの発生など、新たなリスクや不確実性を惹き起こしているとの見方がある一方で、そのダイナミズムが人々の生活水準の改善に資するとの見方もある。

また、「グローバル化」により価値や理念、社会システムの一元化・標準化が進むとの見方がある一方で、「制度的多様性」と調和するという見方もある。